

国語部門

総評

例年と同じく、作文よりも読書感想文の応募が多く、映画で取り上げられた題材やドラマ化された作品などを題材に書かれたものが目立ちました。
本年度も、読書で伝ええるために重要な文章構成能力「表現力」といった点に特に着目し、選考の基準といたしました。小学生については、文章構成能力が身につけていないため、着眼点や描写力は素晴らしい生徒とそうでない生徒とがあまりに差が大きい作品がいくつかありました。中学生については、文章を書き慣れている生徒とそうでない生徒との差が大きい小学生の時点で基本的な文章構成能力を身につけていないからか因るころが大きいように思われます。小・中学生ともに「文章を書く練習が不足している事にも」かきを感じました。日々の努力を望みたいところです。

賞 文部科学大臣奨励賞

拾えなかった空き缶

兵庫県 愛徳学園小学校 6年

和佐 夏希

電車が駅に着くと、空き缶の動きが止まる。電車が発車すると、空き缶は再び踊り始める。こんなふうなさいのに、誰も見向きもしない。「みんな知らない振りをしている」私は少し腹が立つたけど、自分が拾って、降りの駅で捨てればいいのだ。簡単なことだ。でも、分かっているのだけれど、体が動かない。学校の「掃り道ボウファイア」ではいくらでもゴミ拾いが出来るのに、どうして出来ないのだろう。中略
「あと四つ、あと四つ待つて、お願い。」私は心の中で空き缶にお願いした。空き缶ときどきさんなドキドキするとは思わなかった。次の駅に着いた。ダンスは休息し、車内つかの間の静寂が戻った。すると、すぐ近くに座っている女の人が腰を上げ、空き缶を一個拾い、さくさくと降りてしまった。「あれ？」私の心の中にぽっかり穴が開いた。抜粋

電車の中に転がる空き缶。拾いたいけど、拾えない自分との葛藤。誰もが一度は経験したことのある日常の「コマを、夏希さんは実に表現豊かに描写しています。特に、空き缶が転がるようすをダンスに例えたり、シナリオ通りのタイムリフで転がってこない空き缶を女優に例えるところは大人顔負けです。
注目ほうストシーン。葛藤の原因だった空き缶が他の人に拾われてしまう場面です。「こで夏希さんは、ホッとせずに、心の中にぽっかり穴が開いた」と感じます。豊かな感受性、人間的魅力を大いに発揮できている作品です。

賞 子どもの文化・教育研究所理事賞

ジコお兄ちゃんとほくの出会い

愛知県 愛知教育大学附属岡崎小学校 2年

杉浦 奨

「さようなら。ジコお兄ちゃん。」
車の中から、ほくは今までに出したことがないような大きな声を出した。お兄ちゃんが手をあつめる。ほくも見えなくなると、なみだが出てきた。止まらなかった。(中略)
ほくには兄弟がいらない。もし、お兄ちゃんがいたら、こんなかんじかなと思う。遠くいてもほくの顔を見るときうれしそうに走ってきて。
「しゅわんちゃん。」
と言いつつ、ぎゅっとだきしめてくれる。ちょっといいけれど、うれいと思ふ。抜粋

「ジコ」お兄ちゃんとほくの出会いというタイトルに知り、「さようならジコ」お兄ちゃん、という意表をつく書き出し。読み手を惹きつける工夫は、とても小学2年生の作品としては思いません。奨さんとジコ「お兄ちゃん」の出会いから別れまでのやりとりを、端的且つ正確に読み手に伝える表現力に驚かされます。二人をまつたこと知らない人でも、この作文を読めば自然とその時のやりとりを想像でき、すまうほどです。端々、気持ちを表現するときに使った言葉が文章をさらに魅力的にしています。

賞 社団法人日本児童文芸家協会会長賞

「鼻」を読んで

千葉県 千葉県立千葉中学校 1年

長谷川 隼

内供は自分の鼻をコンプレックスとしか思いついた。何となく、内供の周りの人はおそろく内供の鼻を個性として見ていて、当たり前のように思っていた。だから、それが無くなったのが、内供が内供でなくなつてしまったようでも逆になかたのたのた。 (中略)

アトピーも僕らの体の一部であり、持て生まれた個性なのだ。だから完治したときはうれい気持ちになるのはもろいんだが、少し寂しい気持ちにもなるのではないかなと思う。抜粋

芥川龍之介作品の「鼻」と、自分の幼少時代からの体験を重ね合わせ、内容理解に上手に繋げられています。また、この本から「自分の個性を大切にしよう」というメッセージを読み取るまでの筆さんの考えを、いかに相手に伝えるか意識し、文章が組み立てられていきます。段落の分け方も配慮されていることにも好印象を受けました。
起承転結を意識した文章展開ができおり、言葉の使いの巧みさといま、表現能力の高さを感じられました。

賞 中央出版株式会社社長賞

大好きなほくのがばいじいちゃん

熊本県 熊本市立託麻小学校 5年

堅島 敢太郎

物は、絶対に使えない、というまで使ったら、やつと捨てるじいちゃん。ポットがボタンを押しても出なくなつた。あなたならどうする?じいちゃん、ポットを湯わかし機と改名して、水を入れるふたからおたまでくんでいる。(中略)

この本のがばいじいちゃんとは、ほくがばいじいちゃんとは少し違う。でも、ほくはどちらでもいと思ふ。ほくもがばいじいちゃんができるようになりたい。抜粋

敢太郎さんののびのびとした表現に読み手も笑顔になります。「がばいじいちゃん」の特徴がうまく捉えられていて、ただ紹介するのはなく「こ」モアを織り交ぜながら表現している点や、文章構成には目を見張るものがあります。「次は」「それから……」などで場面を切り替え、短い文章で区切っている。テンポよく読みすすめていく。何よりも「がばいじいちゃん」の事が好きという敢太郎さんの気持ちがよく伝わってくる作品です。

賞 優秀賞

おねえちゃんになった日

群馬県 ぐんま国府カレッジ 初等部 2年

齊藤 若葉

曲に負けるな

愛知県 愛知教育大学附属岡崎小学校 4年

秋吉 美紅

大好きなおじいちゃん

愛知県 碧南市立東中学校 1年

服部 葵